

ざ時も至りぬ、只今思ひきはめよといひしかば、心得候ぬ、御はからひにて恥辱を雪ぎなん事、いみじう悦しくこそ、此上跡の見ぐるしからぬ様に頼み奉ると式禮して、白く清げなる肌をぬぎ、刀を取てすでおしたてんとする時に、伯父の云よふ、今しばらく待てよ、汝今死ぬるは猫の腹に入て聲するが爲に、わづらはされて恥しさにの事にあらずや、今はの時に夫ぞともきかずして終らんハ詮なし、今一度まさしく聞定て、其聲にしたがひて刀をおし立よと有ければ、刀を持って心おくれて聞へぬなり、心をしづめてよく聞と、うちしきり問へども、聞へ申さずといふ、さらば今しばし待て、其わからもなく急ぎなんは、誠に犬死ぞかし、夜更るとも聞定ての事よとて、一夜附居て去ばく問ひしかども、終に聲のせぬよしなりければ、さらばとまれと、うちわらひてやみぬ、これよりして後絶て心にかゝる事もなかりけり、かしこかりけるはかり事哉と、時の人申せしとぞ、

〔北邊隨筆〕孟中蛇

晉書云、樂廣字彥輔、常有親客、久澗不復來、廣問其故、答云、前在坐蒙賜酒、方飲忽見盃中有蛇、意甚惡之、既飲而疾、于時河南聽事壁上有角弓、漆畫作蛇、廣意盃中蛇即角弓影也、復置酒於前處、謂客曰、盃中復有所見不、答曰、所見如初、廣乃告其所、以客豁然意解、沈痾頓愈、とあるに、いとよく似たる事あり、有馬良久といひしは、近世の名醫なり、あるやごとなき所に、物に汲おきたりし水を、夜陰にのみませたまひしが、そのあした、かの水を御覽じけるに、あかく小さき虫、おほくわきてありしかば、たちまち御はらいたみて、たへがたうし給ひしに、良久丸劑をたてまつり、箱してその虫のくだらんを試みさせ給へと申されしに、げに其言のごとく、赤くちひさき虫、いと多く出たりしを、御覽せさせたりければ、御はらすなはち愈ぬとぞ、そのたてまつられし丸劑、まことは赤き糸をき